

一宮川ふるさとの川整備計画について

一宮川は、千葉県房総丘陵の北部、長柄町針ヶ谷の権現森を源に発し、九十九里海岸で太平洋に注ぐ本川の流路延長37.3km、流域面積203km²の二級河川であり、流域には約十二万人の人々が生活している。

近年の洪水では、平成8年9月22日の台風17号により、茂原市をはじめ一宮町、睦沢町及び長生村で氾濫し浸水家屋約2,600戸に及び河川激甚災害対策特別緊急事業が始められ大規模な河川改修が行われている。

この大規模な河川改修に併せて、沿川のまちづくりと一体的に水辺空間の整備を図ることが関係町村から要望され、平成11年11月に河口より約7km区間がふるさとの川整備事業の指定を受けて、学識経験者、地域代表、各種団体代表及び行政で構成された「一宮川ふるさとの川整備計画検討委員会」が発足した。

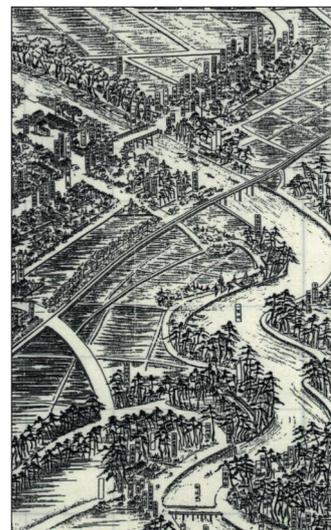
また、地域に期待される『ふるさとの川』となるよう、アンケート調査、教職員研究協議会による環境教育調査、一宮町観光協会との意見交換会等を開催しその意見を計画に反映した。一宮川に求められているのは、昔の一宮川であり、原風景の復元を基本に計画が進められた。

右の鳥瞰図は、昭和7年に墨で描かれた一宮川であり、JR上総一ノ宮駅や芥川龍之介ゆかりの宿一宮館に飾ってあ

前 研究二部 主任研究員 滝浪 善裕

る。これが、地域の求めている一宮川の原風景の姿である。河口は、海水浴で賑わい、堤防沿いには、黒松や桜の並木道があり、水辺は葦が茂り、観光船（ポンポン船）等の舟運も盛んであったことが伺える。

一宮川ふるさとの川整備計画は、これらの原風景の復元とともに、とにかく緑豊かな川辺の景観を創出するために、関係者により多くの工夫やアイデアが提案され計画が策定された。



流域圏における調整・連携の推進策

研究第一部 主任研究員 黒川 信敏



循環を介して流域圏と密接に関連する水や土砂に関する諸問題、森林や農地の適正な管理に関する問題は、それを担当する行政組織の所管区分を越えて広域的かつ複層的であり、流域圏を視野においた対処が不可欠である。このような中、地域の河川や流域圏の環境を保全・創造しようとする自発的な市民活動や流域市町村などの連携による地域づくりが各地で盛んになっている。しかし、このような取り組みには、横断的な調整や連携上の問題もあって考えられ、より良い組織づくりや適切な制度の工夫などを必要としている。

特に、治水対策、土砂管理対策、水質保全、森林・農地管理、廃棄物処理対策など各課題についての施策の展開を並行的に進める際に、各課題に応じた施策間でどのような利害対立などの問題が生じるのかを把握し、それを横断的に調整するための体制はどのようなものが適しているのかを検討する必要がある。

そこで本調査においては、流域における各課題について、流域単位で総合的な取り組みをしている国内・外の事例からその取り組みの体制を類型化した。また流域圏における国土管理上の課題、施策の総合化の必要性について検討した。

その上で、今後の流域圏アプローチを展開していく上で必要と考えられる施策として次の取り組みを提案した。

流域圏アプローチのPR

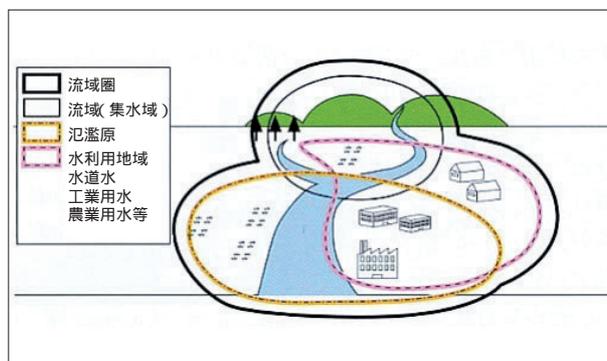
流域圏アプローチを担うNPOへの支援

全国の流域圏の実態に即した調整・連携のための体制づくり

流域圏アプローチのための調整・連携事業の推進

流域圏レベルでの土地利用計画の立案

流域圏総合研究機関、流域活動活性化センターの設立



21世紀の国土のグランドデザイン」における流域圏の概念図